

「病床回顧」

長峯 良斉

「胸部腫瘍手術」それは肺ガン手術といえピンとくるかも知れません。詳しくは、胸部腫瘍の中で悪性と良性とに分けられ、それによってガンとそうでない良性の腫瘍とに区分されている訳です。

私は思いもよらなかつたこの病魔に襲われ、慶応病院で一昨年の夏手術を受けました。—そうです。真夏の七月三十日でした。普通このような大手術は、真夏は行わないのとこのでしたが、「貴男の場合は一日も躊躇できません。急ぎましょう。」との医師からの強い進言があり、急遽手術を行ったのでした。

戦時中は、人並みに随分危険な体験もしましたが、幸い一発の敵弾も受けず、さらに奇跡的とも思える救助を受けたりして命永らえてきたものが、四十二才にして遂に病魔にやられるとは・・・。。。。。医師から死を宣告されたわけでもないのに、病気が病気だけにヤラレタ！と言う観念が先に立ち、無念やるかたなく手術台にあがることを決意しました。

このとき思い出さ手たのが、丁度一年前に「貴男は胸をやられるおそれがあるから気をつけなさい」と言っ注意してくださった水野義人先生のお言葉でした。水野先生と言

えば覚えておられる方もあるでしょう。私達が霞ヶ浦で操縦・偵察に分かれるとき適正飛行を行い、その後で両手に墨を塗ってペタリと手型を押し、更に別室で一人一人が観想家の先生の前に十秒位坐つたことを思い起して下さい・・・。。。。—そうです。あの先生です。私はたまたま病気になる一年前に、桑原会長のご紹介でお会いした際、注意とも、予言ともつかないご託宣を受けていたのでした。

当時、胸部のレントゲン写真には絶対の自信を持っていた私ですから、「そんな馬鹿なことが・・・。」と一笑のもとに忘却していたことが、忽然と思い出されました。「そうだ、一年前の予言が的中されたのだから、手術後と自分の生命についても、的確にご指示下さるかも知れない。お尋ねしてみよう」と早速電話でお願いしたところ、すぐに病院において下さって、ベット上の私を、やさしい眸の中にもするどい視線でジイツとご覧になり「あなたは大変良いことをしてこられましたね。そのお蔭で命は助かりました。手術は安心してお受けなさい、腫瘍は良性ですよ」とおっしゃいました。私は一瞬キョトンとしました。助かるということは勿論この上ない嬉しいことです。しかし、肝心の「良いこと」には心当たりがないのです。そこですぐ私

はそのことについて重ねて質問しました。「私は悪いことならたちどころに五指、十指いやそれ以上も数えることができます。しかし、残念なことに、命が助かる程の良いことと思われることは何もしていませんが・・・。」と。すると先生は柔和なお顔にもどられて、「そうですか。ハハ・・・。」と、もうこれには何も答えてくれませんでした。

そして、手術も無事済んで、主治医から「悪性へ移行する一歩手前でしたが、良性（ガンでない）でしたから安心なさい。三カ月位で退院できるでしょう」と言われてホッと安堵し、再び人生を見つめる喜びに浸ったのでした。それにしても、水野先生の的中に驚くと同時に、どうしても頭の隅にひっ懸つてとけぬのは、「命を助けられる程の良いこと」とはどんな事なのか？と言うことでした。「とはどんな事なのか？」と言うことでした。あれこれと思いつめながら、どれかを探し当てようと努力しましたが、どれもこれもとるに足らないことばかりです。本当に思い出ただけでも冷や汗が出るようなことばかりで、とても神仏の御心になつて命を助けていただけのようなことなど、思いもよらぬことばかりでした。このようにして、ベットで瞑想を繰り返す事何日かで、遂に思い当りました。それは最も手近に現在進行中の慰霊碑建立の事業を推進していること、こ

のことはなかるうかと言うことでした。”
そうだ、これだ、これ以外にあるうはずがない。そうしてみると、これは私一人だけではなく、大勢の同窓にも当てはまることであり、自分はただその中の一分子にすぎないのである。一分子の自分でさえ、神仏の御心にかなつて、肺ガンから罪一等を減じて命だけは救ってやろうとのおぼしめしがいただけののなら、この英霊の顕彰、供養はなんと偉大な事業ではないだろうか。そしてこれに対していろいろな形で協力して下さった方々、みんながそれぞれに尊い功德を積まれておられるのである。それがそのままに神仏が御見通しになっておられるのか。“と思った時、嬉しさと有難さとの感激で熱いものが一時にどつとこみあげ、滂沱として動けぬ体の枕を濡らしたのです。

（手術に当たって、予科練の恩師や戦友から尊い血液の提供と激励を受け、本当に私の一生忘れ得ない感謝の想い出となりました。）

（この記事は、昭和四十二年四月発行の「予科練」1号に掲載されました）